

横井小楠 —その業績と生涯—



幕末の肥後藩には、3つの党派(主義主張を同じくする士族のグループ)がありました。時代にあった道徳的な政治の実現をめざす実学党、これまで守ってきた藩政を続けることに努める学校党、のちに尊王攘夷(天皇を尊び、外国との交流をこぼむ)を主張する勤王党の3つです。実学党を結成したのは横井小楠と同志たちでしたが、同志たちはどのような人たちで、実学とはどのようなものだったのでしょうか、また、党派間で、どのような問題が起こったのでしょうか。

5 実学の起こり

横井小楠とその同志は天保12年(1841)ごろから、自らの実践に重きを置く朱子学の研究会を始めました。メンバーは時習館時代からの友人で、家老*長岡監物(米田是容 家禄1万5千石)・下津休也(1千石)・元田永孚(550石)・荻昌國(250石)そして小楠(150石)の5人です。研究会のテキストには朱子学の内容のあらましを説明した入門書『近思録』を使いました。皆で読み合わせをしたり、既に朱子学を学んでいた長岡の講義を聞いたり、質疑討論を活発に行いました。議論が行き詰まった時には小楠がその解決のきっかけを出すこともありました。

研究会では会を重ねるごとに政治のあり方に眼を向けるようになり、道徳と政治を結びつけた「堯・舜・孔子*の道」、すなわち、中国古代の聖天子が行った徳政のような理想政治の実現をめざしました。これを真の実学とし、「実践すること」を重視しました。家老長岡家の屋敷など会場にした研究会の回数はだんだん増え、参加者も多くなりました。

当時の肥後藩は、深刻な財政難が続いている状況でした。そこで小楠は、財政改革論「時務策」*を立案して、藩政改革を求めました。また、時習館での教育についても実践を重視すべきで、字句の解釈や暗誦を主とする学風を改めるよう、藩に申し入れました。そして、これらの提言を次席家老の長岡監物を通して藩政に浸透させよう

としました。

これに対して、時習館(藩の学校)や藩政の現状を守ろうとする藩の主流「学校党」は、トップに筆頭家老の松井章之(家禄3万石)をすえ、長岡・小楠ら「実学党」の意見を取り入れようとしませんでした。こうして2つの党派は対立し、ついには、松井対長岡という家老同士の対立となりました。しかし、家老の役目は藩政の全体をまとめることです。長岡監物は藩政の混乱を避けるために、自ら家老職を辞職しました。このことがあって、監物宅での朱子学研究会は中止となりましたが、一方で、小楠の塾がスタートしました。

*家老…家臣の中で最高の地位にいる人。細川藩には松井・米田・有吉の世襲(子孫が家老を受け継ぐ)家老三家と一代家老が数人いた。米田家は家老に就任すると長岡監物を名乗る。

*堯・舜…いずれも古代中国の伝説上の聖天子(徳の高い帝王)。

*孔子(前551～前479)…中国春秋時代の思想家、徳による政治を強調。儒学の祖。

*時務策…上・下の身分の者がともに節約をする。貨殖(藩がお金を出し、財を増やすこと)をやめる。町方制度を整える。



▲米田是容の下屋敷(現必由館高校敷地)

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。